





## は　じ　め　に

若葉がその緑を一層深めて、折り節に、早や真夏日を思わせる陽光のもとで、水や砂、果ては泥んこまみれの遊びに夢中に打ちこむ園児達の逞しい姿が見られるようになりました。この頃はまた、私どもにとりまして「ひとりひとりを生かす保育」の継続研究の成果を重ねて世に問う大事業の時期の到来でもあります。子ども達の成長の事実とともに、その実践の成果はまた確かな証しを必要とします。それは、いわば子どもにおける発育や発達の事実確認と、それをあとづける基礎的諸条件との対応を見てとる全体的な活動のプロセスを見据える機会でもあります。私どもは方法論の立場から、研究のねらいを教育や保育の実践を通して期待される終局の成果にのみ置くのではなく、むしろ到達すべき具体的な目標に向っての現実的な努力の過程に立ち現れるその力動・成生（ダイナミック）にこそ生きた教育・保育の基本的視座を構えることの必要を感じます。したがって教育や保育における方法が、見かけの結論を急ぐ皮相な能率主義や技術主義のそれと決して混同してはならないというのが私どもの共通の、そして基本的な警句でもあります。目標への到達のプロセスを見据えるとは、それによって子ども自身の内部世界の実質的变化が確かに起り得るその事実と確信の存在を前提とすることに他なりません。子どもの保育実践における活動は正に子どもを観る者の眼によってたしかめられねばならないと考えます。この趣旨に基づいて保育者教師は、文字どおり「ひとりひとり」の子どもの生きて躍動する相を<sup>すがた</sup>追い求め、その継続的な観察の中に保育実践にとって必要な条件の周到な配列を考え、評価する実験的試行の推進——反省、吟味、計画の再構成の実験サイクルを方法の基本手順としながら——を図って参りました。

個性の重視、個性化の原理は教育や保育実践を支える基本概念であり、理念であります。即ちそれは、他にとって代ることのできない、その子どもなりの資質や特性を見極め、大切にして、それを有用な方向に発展させる発達の課題に関係します。自ずから感

覚し、独自の感性に訴え、自分の経験に照らして考え、遊び、行為し、表現するところに個性的表出の相があります。その意味で個性とは、際立った特性の有無にかかわらず存在する1人ひとりの子ども自体の固有の<sup>き</sup>性という普遍的な事実なのだと言えます。自主性、自発性、主体性など、すべて自ずからに発し、表わし、自ずからを行わしめる個の原理に立つ言葉であります。これらはひとつの系列をなす用語として教育活動全体の中に不動の位置を占めており、期待される目標や評価の視点から常に伺われ、教育や育ての志向する実質を表わしております。言うなれば、それは子ども達が自分からすすんで積極的に遊びや仕事にかかわっていく、その生活現実の中にあるのだと言えます。更にいえば、単なる外からのおしきせではなく、自発・内発的に取り組んでいく「生きいきした」自己表現の在り様にも関係するとともに「ひとりひとり」の独自の活動の発展に結びつくものであります。

「自分でみつけた遊び」の「場」での子どもの自由な発想や試行や気付きや発見は、日々新たな活動への創造につながりましょう。

水、土、砂、草、花、虫、小動物、木、園庭の空間、築山の斜面、トンネル、遊具、道具、のりもの、あるいは空気、風、光さえもが——香色を含めて、これら素材・環境を有効に生かして遊びを組み立て、友達と共有し、アイデアを附加して、より豊かな活動へと膨らませる。遊びにおける約束などの素朴なルール形成の芽生えを大切に育てることは、社会化の貴重なモーメント、子どもはお互いの利害の合理的処理・調整を体験的に確かめるのであります。「子どもと共に創る生活」とは、子ども自身による生活の創出と教師の正しい意味における側面的な援助の機能的統合に求められるものと考えます。

御参会の皆様の率直なご批判、ご指導を心からお願い申し上げます。

平成元年6月

島根大学教育学部附属幼稚園長

福井 一 明

# 目 次

## ひとりひとりを生かす保育

—— 子どもと共に創る生活を通して ——

### 総 論

「子どもと共に創る生活」を通して	
Ⅰ 研究主題について	1
1 主題追究の経過	
Ⅱ 副主題——「子どもと共に創る生活」を通して——その設定と基本的な考え方	3
Ⅲ 研究方法とねらい	4
1 方法および視点	
2 ねらい	
Ⅳ 昭和63年度の実践からとらえた子どもの生活の諸相	5
1 子どもが見出していく環境と活動の展開	5
事例1 水たまりをみつけて 4歳児・7月	5
事例2 「今日は落葉だらけ」 4歳児・11月	6
2 友達とのかかわりの中でつくっていく「日常的な経験や活動」	7
事例3 お弁当の場づくり「ダイヤモンドにしよう」 4歳児・12月	8
事例4 めあてをもった片づけ活動 4歳児・2月	8
3 ひとりの活動から学級全員の活動への広がり	9
事例5 なわとびの活動 4歳児・10月-3月	
4 子どもの願いや欲求にもとづいて展開していくその期の生活	12
事例6 「サンタのおじさん、ふぞくようちえんにもきてください」	12
事例7 モルちゃんの遊べるおうちをつくりたい 4歳児・11月-2月	18
Ⅴ 「子どもと共に創る生活」における指導性と課題	20

文責 野 津 道 代

巻末資料 昭和63年度の「年間の経験や活動」の実際と期に期待する姿	21
-----------------------------------	----

ゆり組 (3歳児) 森山 純子  
うめ組 (4歳児) 野津 道代  
さくら組 (4歳児) 小林 保恵  
つき組 (5歳児) 星野 和美